閑卷驚奇俠客傳 乙編 五

へ13
3156
12

3156
72

仏教

開卷驚奇俠客傳第三集巻之五

東都　曲亭主人編次

第二十九回　隆光千速ふ他賊を驅る　長総逆旅ふ騙局ふ遭ふ

姑獲姫ぶ那夜艾庭ふ鳴く虫の音ふ殺氣あるを知らる。綜の顛末ハ且休題先說當日河内州石川郡ゑる。千劍破村の稍盡ふ五十槌電次隆光と唱做る强人の頭領ありけり。初ハ山名陸奥守氏清ぶ隊ふ隷る。紀路の野武士ゑるふ北朝の康應元年中六年己巳の冬十月氏清謀反ふより滅亡の折隆光ハ辛くして戰場ゑ脫れより河内の千劍破ゑ歸る由緣ふ就て。楠正勝ふ從ひ奈れぶ。正勝敢て奈れを用ひず左右ゑる程ふ南朝ハ元中の末ふ至て楠氏略ぼ衰ハれぶ正勝竟ふ千劍破ゑ落て迹ハ千津川ふ埋め折隆光ハ畠山国ふ降參せまく欲せず。かゝる心術表裏の癖者ゑるより。その降參を受ざるれば隆

光は武術を学ぶ千剣破村に僑居せんと人の空房と求む膝を容れて武艺を那這人に教ゆ
る。稍生活の暮れども口と餬ふ足らざれば飢渇に及ぶ日もままあり。人窮まれば邪智起る隆光
素より武艺あり。膂力は十人に敵すべく。穿窬の術さへ克せり。鄙語に曰く萬能も一芸
善きに過ぎざる。残忍の性の癖あれば早晩不良心発して遠く野に出て前方径を点と
せ日もあり。或は墻を踰梁を渡りて竊に金山袴無く迹を接ぎ欲するに同氣相求ぶこと
那の子人仲間に知られて武艺の弟子に做る。乾児と倡て悪事と幇助るものあまた
隆光是より猛可に富て家を廣く郷士と稱て陽に武艺の師範なれども陰に夜掙を
宗と做す石川郡の民家を犯さば他郷より来る盗賊あり五十槍の隊を隷すれば隆光
必ずこれを知て憎むこと仇のごとく住處を洗出し捕らへて立地に殺してけり。されど外より来る
る盗賊はいつ之地方の好民悪少年も悄々地に怕れ相敬ふ。竊盗の悪事と做ものなければ
一郡通て粛静なり。路に遺るを拾ふこと無く夜鎖でも患ふる民の欲べからず本州の守護

遊佐就盛も件のように伝聞て這隆光を強人の頭領と恐れ他が如くに地
方の城を築しと最憑く思ひ然れば又這隆光が獨子に雷九郎隆成と喚ぶ
勇の癖者あり。乳臭毛だに後生なれども身長五尺七八寸武艺力量共に父の風を親
ぶ。少年修煉あれば年十三四なるに比して隆光と共伴に近国他郷に赴き夜掙を事とせ
ること。年来なるに隨て父が折々他郷に到る。有一日悄々地に諫るやう世の鄙語に覺
る仁義なりと教へられども時宜によりて之を顧ぶに這石川の郡内に寺に十堂伽藍あり民
も豪農富商ばかり這辺近の貨財を集めて遠く他郷に赴き些の獲物あり
て往返の盤纏に費せば労多くして功少なし千剣破赤坂龍泉
寺水越巓の這方なる荘院を却て奪ひ他郷に赴くに労せずして大利あり這議に
儘しめんと賢達に耳に隆光聴き頭を掉て和郎が意見に近き利を見て遠
く愚を知らざる我身年来這里に在て徒党を聚合て緑林白波の夜掙を旨と

まれども。這地を犯さと思れば。地方の人に愛敬せられて。真面目を知るものゝ。然るを和郎が如。今より這地を掠奪せば。縛遂に發覺れて。遊佐より緝捕使と向られ。その折戦を利りとも。そは長久の計にあらず。小兒輩に意見島許へと誘引に叱懲しに。折々雷九郎隆光と他郷掠るに遣ず。村人やる伴て。武者修行と與と唱て。雲館奇峯五曾々利鼠坊八白鮫振平。出水挺頭三木綿張荷三郎などと。吸做る。宗徒の強人と。廝従にその身に無に宿所に在り。浮る雲の富に儘して。酒をぐされば。樂しとて。酔て眠る。覚て又喫む。人間の歓樂にこの外あらじと。思ふに。這電次隆光が妻に。郷高に世を逝て。近屬一個の側室となる。姿の花に盛過ぎて。年は四十に近うゝ。老打見は三十許る。氣色空華めて。よく媚れば。隆光只顧愛敬とぞ。一家児と任用ける。是なれば且休題。扨解出せば。三三回の長説話に。看官猜しねるもあらん。そを何哀だと。尋るに曩に。衿笠小夜二郎と共伴に相模の氣賀に立退たる。藤白安同の鬼妻長総が。旅宿の事。顛末を。姑麿姫殺

き〳〵氣を知る段より。茲に至て説話は路に分れて。後竟に一路に合ふ。ちあるを看官徐に思へ。間説休題扨も小後長総に良人藤白安同が死後にその罪見れて。従類氣賀を逐れ。折能陽出身の小夜二郎と。いそ夫婦にあらんと。同財を腰に。衣裳も綾羅錦繍を。のみ行裏に藏めて。小夜二郎は駝に足柄山をこえ踰て。遠江の花の都路へ。あでつぽくも。せく程に駿河の喜瀬川の頭より。年は二十五六。嚴成る旅客の。細小なる三箇の行裏を。肩の前後にこち被て。菅笠を戴たる。後に跟に先に立て。折々のぞいかるに。小夜二郎は。長総が目を注て。応せず。快郎さんと。呼ぶに。故意茶店に立よりて。憩へ。他も憩に。猛可に。快走れば。他も亦快走りて。生憎に。貫緑を。せん術なく。困る。小夜二郎は。傾く日影を。こち仰ぎ。瞻て。然氣なく。長総といそがして。卒富士川をこち渡て。今宵の歇店に着んと。走て。馬頭上に赴て。前岸より。漕寄る。船を姑且こち程に。旅宿に。経紀人にあるん一個の伴當と共伴に先に来て。船と。そなて在り。方僅小夜二郎が跟に。来る。夕人城

熟視て忽地聲をあげ立て噫竊盗奴が大胆なる這方さまハ鎌倉の我生活の花
と主るに圈套に掛んと欲するも我ハ這東海道を年の内六回も七回も往還する甲斐に
汝が面ハ認りたり然でもいるぎやるる不賞縁ハいで荘官許牽のそばへて目に物みせんと數
圍て猛く罵りながら立向へバ旅人驚て推禁めて。やよ親方よそる邪推ぞ這方さまが旅
熟ぞとて去向を屡問れしかバ黙止くて共侶にまゐるを痛く叱るよりハ噫我ながら鈍ま
しや。市場の茶店に憩ひて折要ある東西をうち逑れて今しも來にけり那里にあるハいで
走一走いてこそ來んとおひ瞻ても夕照に掛損ひたる叢雲の果敢なく剥る五月の天の暮
程ほど遠くく東を投てかへりゆく。开方を小雲妾時目送りてる長総ハ小夜二郎と面を瞟し吻
と息つきて倶に件の旅客にうち向ひ揖讓して出ひける好意も毒蛇の腮を脱れる歡びを
陳る程に艄父ハ船を操りて辛く這方へ着にければ旅客ハ応も果ず卒とぞく皆共侶にぞ
まく船にうち乗りて漕しく前面へ渡しけり。然而件の旅客ハ小夜二郎們とうち連立て瀬津まで

を指く路をがら詞徐に告るやう。在下ハ鎌倉の本町にて百麻織屋絹七と喚做る經紀人で
作が京師にも老舗あり那里よりおこせる東西を鎌倉にて賣りもし又東なる名物を京師へも
遣して交易を旨とすれバ年の内に両三度上下りをせざることなし。今番ハ京師へ赊あ
まべきも合せん與に東西を齎せバ徒ハ身軽く旅をするにてあらされバ故ある狭猶秒著
方さまの脚小を伴ひて何里を投て赴ぬるにぞ這頭にハ護摩の灰と喚做る小賊のあまた徘徊
することあるを不知案内の旅客ハ他們が為に謀られて盤費ハいふも更なり行李まで奪れぬハ稀
なり。されバ在下這義を知りされバ御宗に和君二人の護摩の灰に限られて最も難義に及ひし哉
且かも精して禍鬼を禳ひまゐらせんと然ハさりとて又那奴が引返し跟て來て賞縁なく旅料を
かすめ這中の江と吹上津の間なる七難阪と喚做る最も難義なる荒磯ありて那里にて旅
客の前刀徑に殺されたりけるも幾名歟ありと傳へて七難の名ハ在る所以なり偏京師へ赴る
ありて在下伴ひまゐらせん在下ハ定宿あり。今宵ハ瀬津へ到んと欲すぞせめてと遽しく慰

富士川馬頭絹七億騙賊
むち内
きはん七
ひまのえん
はんニ
有像第四十

さよこ
さよこ
五

められても怖氣生く七難阪八何里ぞと四下アラる長絶ぞ扶掖ぞる小夜二郎ハ絹七ハ答ゑ。
洞本且差ぞ我们ハ這回ガ初旅ぞ這脚小ハ我妨ぞ家の艱ハ身ぞ措難て相摸より京
師ゑ。所親ぞ便着ハ適まく欲ぞ見らく如く婦人ぞ俱ーたる進退不便ぞ旅ゑハ今
朝より女人ハ跟られて幾回欲都ぞと欲ーれども不如意ゑ殆困ぞたけハ料ぞ和殿ハ救
れて。初て安堵の思ひとすゑ和殿も京師へ赴ぞめぐぞ幸ハ乞ゑ封助ぞ願ハまと。
ハ長絶も共侶ハ又欲ぞ陳てら吾。旅ハ行伴世ハ好意と欲外ハ少さる世の常言も思ハ今ぞ
我上ゑハ那女人ハ貫縁れてせんぐゑりーたの折の心ぞ猜ーのか。倘ゑ救ハ遇ざりせば東西と
喪ハのこゑ七難阪の頭ゑ。命果敢るくゑりのせん。危ぞゑ思ハ絹七點頭て然ゑ。
在下ゑれぞと。初よりーと二らぞ。面ゑ善りて救ーるゑれども。憶ハぞ開首ハて好造化ハ遇ハ
ゑハ神佛の利益ハそハゑ。現深信ハぞ思ハ就て一條の過去来話説のハ長
途の疲労ぞ慰る。與ゆゑるハ聞ハ在下幼稚ゑーー折日毎ハ鶴岡の社壇ハ詣ー。遊び

銷ーハ有一日ハ社前る。石階ぞ下るとぞ。上一二段の程ゑ。漫ハ足ぞ踏外て壁ハ
米苞ぞ輾ぞ如く幾十數の石階ぞ下ぞ滾落ーハ頭ぞ破ゑ足ぞ損て忽地息絶
ハーぞ親ガ年来八幡宮ぞ信ーまゑーー冥助ハ憑ゑハ。その夜艾甦生ゑ日ぞ經て痍ハ
愈られども。ゑハ額頤ハ足ハ舊瘡の瘢ヨカハ那折ハ禀ゑる撲傷の残りゑ。
ゑとして在下ハ八幡宮ぞ初めより諸神諸井ぞ念ゑるぞ。一日も怠ハ詣ハ。
助もあーゑん本銭ぞヨく費ぞ纏て京師へ赴ぞても賊難ぞ遇ーぞあーハ各位も大々ゑ
ゑ信者ハ乞ゑハ然ぞハけハ厄難ぞ輒く免れハんやとゑる長絶も小夜二郎も宣ハ
然ーと答ゑるハ穏ハ画ぞ照ーて心裏恥ーく思ハ。姑く老絹七ハ小夜二郎ぞ。ゑて。憶
心屈ハ蜀ハ背ハ表ハ行裏の最も重ハ他ハ俗ハ上下ぞ喚ハ
旅ゑく人の伴ぞ立て主の幼本ぞ肩ハ。道中の諸雑費の損益ぞ知るめゑれハ共ぞ俱
ゑて来ゑる。駝ーハ件の伴當ハ立留ーく遽ーく。小夜二郎ハ。

卒なん擔物を駝ひまゐらせん。解卸しあれませ。とゐふを小夜二郎ハゐな推辞てそゐ辰すくはへども。今宵の歇店も近着ぬらんその侭駝ふさくいゐんのミとゐふ伴當ハ強難て後ふ跟そてゆく程よ。並樹の頭ふ馬を歇ゑて。旅客を等つ一個の馬奴あり。小夜二郎们を喚とめてかへさ馬ゐり足康くせん澳津まで乗ゐ給ハずや。遣るべしと薦るを絹七すゝく立對ひて價を論じ馬を央ふて小夜二郎が行裹を鞍下ふ附させて。却長総を乗まる折絹七ハ馬の尻骨を見たてゐそろ擻挧てやよや馬奴心を屬よ。夏の馬ハ蝿ふ惱さそ鞍安ゝぬのなか。小篠折のそ蝿を拂ひな跌せゐよく追てよとゐふを馬奴ハ吟あへずそを宜ふゐさてゐ。我馬ハ性も足掻も徐るれバ鞍味妙へいそぶせ。日暮のをせんと笞も果ず牽出せバ上ふ揺めく長総ハ噫呫ゐ意と身をくゝ。掛る鞍ふ引添ふ小夜二郎落しなせそと慰めて。絹七主僕共侶ふ馬ふ續きて走りしかども。薩埵山を踰果る時候日ハ既ふ暮しかバ辛く澳津の驛ふ来ふけり。登時絹七ハ我定宿ゐれバとて驛盡處なる飯店の門傍ふ馬を駐めさして。長総を扶下し。馬奴ふハ行裹を解し錢を

還し。大家裏面ふ栈を入れバ這里なる雛婢出迎て。手づら着せぬひそゝぎて湯を汲合を。盥と譲る絹七小夜二郎も洗ふ長総を。先へ各々足を洗ふ引れて坐まる客の間ふ早の馳走ハ簿明行燈一ッを中坐席横臥のえと合を出ま木枕四ッ油染て箱ゆも飲ふ四人の外ふ。断宿の客なかりしかバ猛可ふ焼く風爐炊く飯遅き夜食を饗る不樂さ。腹の蛍鳴く草枕旅ゐあれど笥ゆも装る中酒の餚ハ絹七が。今宵の東道と誂へし。澳津棘鬣の濱焼。薩埵浦なる栄螺の殻焼なる是げの推驚もあくぞ最愛たし。過しのへと羞める人の誠ふ推辞もあへぬ酒の餘念長総も沙量ゐねども團坐まで。深るも知らぬ小夜二郎隔昨気賀を立ちしより左ゆも右ゆも影護くて。昨夜の歇店で宿も睡られバ。いよく疲労れふ料も好伴侶をゐて。今宵ハ枕を高ら寝る賀び酒ハ我们が東道ま友西復ゐる情ふてそと受て媼を大原盃やせ臑を顕出ふ山崩き灸鼻肉夾めバ口を指なして躯で囃る喜礼酒與葛言の著類もうち解て。これバ箸と突立てゆしつさまの瞳しぬ浮世雑談時移るまで酔を盡して盃を收

折よ長総ハ浄るホ立を小夜二郎咱们も倶ホと身を起を坐席のうらへ衝脚扶甲斐ゑく仁兵衛
て鍔児離れ縁頬の扇戸開て小解く達と許へめと絹七ホ辞と臥簟ホへりしへ絹七王
僕ハ次の間へ懸を吊しろ行燈と三房の間ホ措更さく倶ホ枕ヨ就ホけ百ゑの夜ゑれ短ホ
夜二郎と長総ハ連日長途ヨ苦辛をるホ今宵のミ稍封助と込て心おちゐそ上ホ小夜深
るまで酒うち喫て醉て熟睡ををうしへハ。鴉鳴ホ日ハ升とも枕を雙べて臥るを歌店の婢
児ホ喚覚されてうち驚ホうく遽しく身を起しう次の間をゑれハ絹七王僕ハ在ホ何里へ見へと
婢児ホ問ハ那二ホこの乞伴侶さるハ緊ホ要のるあれがと未明ホ出て見ゑれとのよ小夜二郎長総
倶ヨ驚ホ且訝く。蒲團の下ホ秘措ホる。盤纏と急ホ撥拶るホ悲しや財嚢ハうろうろ只
是のミホあるぞく小夜二郎ゑ両刀行裏腰着の銭と倶ホ枕方ヨ解て措ホる男女二條の帯
まで。撥攫れけん東西皆あ尺。原来那奴们も女人艱計の騙児ゑありけるとハ。さてハ
千慮の一失悔しやと敦圉ホ罵る小夜二郎と慰め難くる長総も色と失ホ呆惑ハて。

ハるホせんと聲戦しても敵るるれば小夜二郎ハ歌店の婢児の立んとせしを喚禁めて。ゑれ徼妻
且等ね縦両個の奴们ゑ未明ホ出てゆくとも。若们我ホ生ゑぞと出し遣るとゑる。徒ハ済ぎ。
亭ゝ主と召ゑ。快召ぞと苛高ホ聲ホ主人ハ走来て寛解て仔細と詰ホ。小夜二郎ハ東西
皆紙る。縛の趣箇様ゑゑと詞急迫しく舒示と猜ホ那二人ゑ。奪ふて未明ホ走ゆしへ。
若们情由と知ぞとハ。その折我ホ告ぞと。ゆ遣りハ越度ハ況這里ハ那奴们ゑ定宿ハと
ゆ。ゑうゑ騙児の中宿狡這疑ハを解んとゑゑ。快那奴们を趕蒐て牽揭戻と證ゑ事
克ハぞハ金銀両ヨ衣裳ゑ送ゑゑ償せん。熟の方ゑ脱れおゝ応せよと膝ハ鳴しゆハの隨ホ
譴ぞゑ。主人ハ吭ぞ嘆息しゑ。ゑハ宣寡とるゑ。先ホ出て見ゑれとゑる二方ゑ今番ゑ初宿ゑ何里ゑ人
欲咱们ハ認ぞ。ゑ身を親しげゑ。歌店と倶ホ来ゑれば咱们ハ同囲同ヨの一隊と思ハれホ
るホ那二ハ。緊ホ要のゑあれへ立寄ハ里快ゑて残る伴侶ゑ途ゑ會ハ這ゑハ豫て両個の
伴侶ゑ領意ゑれへとゑれ。然ゑあへと歩ハのゑ。高ゑ疑ホ筋ゑハホ禁めゑ。ゑ告ぐゑや。

畳五堂印發

盤纏幷に別裏の皆耗ると宣へども然る大切の東西なるべ。なぞとや甲夜に小可に佶と預け玉
いざ。倘預りて喪に欲外より入りくる盗見るべ償ひもせざれば預けもなせば同行の先へ出たた
れば。罵りのいてろろ。疑へば両個の伴達に東西皆廓に出遣りて還て主人を見ると。
伎倆も世に見るべ抑れ知い孰の里へ赴くなるべ。又那両個の同行人に甚麽
る好で最親く。歌店と倶にあるべる本貫姓名去向まで名告ると驛長に訴く明々
暗々と立ん騙児の中宿なるべ。なぞられて外聞なくて活業の障りと快々名告ぬべと弱
くなえても理に強に執筆返に小夜二郎とれいとだろう息遁る肚裏に思ふ主人の論難極
め理あり我身逆旅に熟ぎる故に盤纏を預ることを知ぎ且那騙児絹七们い富士川とりの
同行なるに最も親に友だと。小夜深るまで酒うち喫て熟睡と走ぎて還て人を外ら
よくも思ふ怒ぎるに刹本貫舊主の姓名今番旅行の情由まで主人に報へ妙なるぞ。
いふまでと思ふ難。悄と長総の袂を曳て。倶に次の間に退て。縛の難渋恁々と歩ようを

耳に示して。その意見を尋ねに長総口に呆て。計の客所を知ぎ。左右に縛りて。
ふるる外に分別なれば小夜二郎いるべ困ぎ又長総と共侶に舊の坐席に出て客と和
げ主人に對て目今いれ縛の趣はべその理なるまで我い鎌倉の人氏老砂笠小夜二郎と喚
做ぬ。佐とせ主君あるとへば。今番に妖京師へ送る秘の旅なれば主君と明々地に名告るべ
か。又那両個の旅客い箇様々々のるに呆れ半日の別伴なれども路に賊難と極れる好意を
感ぎ誘引れて歌店と倶にあるべ。又那奴们も已前の賊の殺計なりけ。那国套に掛ぎ
我年少とは云ぎ然も恬らぎ甚麽武士なるべ両刀を奪ひ去れ一期の不祥
今ぬに面目に既に東西皆喪ぬ進退越に分ぎ這義を以驛長に告て両個は夕人の
往方と尋ぬ縛の便宜なるまで。幾日も這留まるべ。とに主人に又呆れて原来縛
皆な身の由断甘く乗せられぬ縦驛長に告て賊の往方と尋ぬ。ぬ虚ぎと
這頭に足を駐ん今いも尻に帆掛て亟細亞歐羅巴へ走ぎ人なれども俗に念霧に

驛長ハ訴ヘて往方を索ひいろ勿論逗留久けれ儲債も岌むべ。這次ぎ地方の度を任るのを那多人々の出処実名利を疎くぞ期と推し。扨驛長ハよと報て。

定めるるるわ風と趕し影を含るとハ常言ハ似て亀ぐるも縛の便りとるざるひ。小夜三郎と長絶ハ飯店の歎待初ハ似ぞ二次の饌も茶淘冷飯のを喚べども応るあるも亀徒然ハ堪ぞ七出ていえと欲されば銭一文の盤纏を。這里ハ留らんと欲されば儲債の債戸くるべ。苦し胸を慰め難。

言のを繰返るる。商量果るるるを。賊験もなに騙賊们の捕らるを寺んとる左も右も老京合ぶ資る人のあるぞとも敏系華の地されば生活に便着と絶るを考るんやと雌雄絶ハ尋思を考るる這日主人を招ぞ。

小夜二郎ぞ先ひるる。不慮のを五三日。厄會ハるる一甲斐もるる。那騙賊们ぞ往方知れ線。

たの後とも吉左右を待んとかかるべ。今ハも思ひ捨て。投ぎるを。

赴くべれと。稍尋思るれども。售て盤費ハもぞ東西を。但我妖の頭ハ挿る。玳瑁の笄と白銀の釵見二枝ハ。夜放さで臥れば幸ひ。奪ぎれ。良

峴山の片玉ハ。宜ぞ財主を去て。沽却てのひか。と憑む傍ハ長絶ハ嘆嘆とくを抗て。

頭髪ハ挿る釵見。笄と徐と接合れば解んとる黒髪。紛れて類歯と挿更て。鼻紙を。

笄の脂膏とを。拭袱て這笄ハ舊船の玳瑁と造られ。煙もよ。製作る折ハ大金餘を費ぞ。

たるものるぞ。售るハ可愛子を。棄るる世ハ最惜ぞ。薄情や。宝貨ハ身の差替を。飽ハ別れ。

るるハ。這白銀の釵見ハ百挿も背挿も。八九銭の秤目ハ。損ハ預知の三ぞ。一次でも價よ。媒妁を。

てのひと。唧語ぞ。くるる。不樂て。遠與を主人ハ受合を。障子ハ翳。左見右見ぞ現るるるハ。

ぐれども。佶る東西ハ素人の眼ハ届くべくもあ。非除初ハ。

ぐ。金を費ぞ。

あハ稱ぞ。且預を。那這ぞ。

疎ぞ。姑且等せ。と最憑ぞ。応を。

件の粧具を。

退ぞ。

ぞ。

六の日。果敢る。

暮春て。夕饌を。

時候主人ハ外ぞ。

夜二郎们ハ報る。

肇玉堂印發

憑れるあるゝせる笄と釵児と驛の香具經紀人們に當して値を問ひしに皆其の似て麁ろけれバ素人の中も那這と見せて買せんと欲すに玉簪石釵の幾を知る人ヨヌされば綷整ぬ受せんとくろきに町尻る鮮庫人ヶ置てに笄釵児三種を銀七拾五匁にて解ね當んと云れ奈ら貴人をまれバ六十匁の内外にして云ば麁ろぞさて典物に做きと云八十三四匁貴登して受復さも自由なとの長総ら聽て小夜二郎が応を答ぎる膝を拵め主人に對ひて非除七十五匁と申獨ふ以まゝ二言足らぬ文然とて云ふ情見時價外れで侍らんと思ろぞ典物さればぬくびゐ入ることもあるべし。それより上へ借まじと向ふを主人は听あるゝ不七十五匁を銭回とて討論で決着あるまでれバそぞ上へ力及ひかゝるれども薦めするもふあるざ左も右も商量して後悔するあるそとへバ小夜二郎點頭て現時價に當らぬとて値を論ずる折ふあるひ今茲に日告の出來ゆるあるけん。箸でふ持ねて丐ふあると輪有る鐵戟ふ何日までる憎る京師に到る便りに就て受復を與ゐれバ枉て七の字あるべし。那議に儘しあるぞと云に長総嘆口氣して隨ふ衆商

量らねバ質と決めて蜂掃ひ苦ふする只身の住方盤纒に足るべき金あらバ何程も償べし奴家も決着を思ひ絶て待るかしといへバ主人は懐より報條一通を出して先づ金子を貝に可が巴易て勘定仕らん僦賃は當る夜の初歇が四人前にでもあれ銀六匁當晩の酒と餚の値が拾六匁五分その次ぎ日より又二人前一个日が三匁五个日合して拾五匁這那大約今宵まで捴ヨヌ宮参三拾七匁五分は渡し下さるべしそを七拾五匁をもて差引見れバ金弐分弐朱卒々受合まへしといひつゝぬらび懐より件の金を合まいだしうち開たる報條に乗して恭しく遞與まるを倶ふ呆て長総小夜二両と照し艴然として御亭主そち貪慾なるかな我們二名の僦賃は當然ることなから那両人們が僦賃と那奴們が買合せる酒餚の値まで差引合ふられて可らんやその議は決して受引ヶしと男女齊一へ敦圍くを主人は听も推禁めて弦慣りもある一文でも受ずる錢を合るふあるびいぬる朝先へ出てゆかれし那両個の客は行伴と仇のごとくに言へども口言見れバ行伴にあらずとせらるゝ證ハ何ある客ならんそまさうさえや那夜分の酒餚は客身一个で飽まで不飲もたゞべくもあるかえと

白喫せんと人々多く經紀人ハ聊かの利を顧て宅眷を養ふに損して何ぞ所依をせん住居ふても些も諍
ひ或ハ是非に及バぬ驛長に報て地方の法則に儘せんその折後悔あるなと譴るを云ふ解に
ても解ぬ縲絏に繋れ資を掠られし上なれバ小夜二郎も長総も争ひ輸てあるり立腹を又に
押て默然として姑且して長総ハ小夜二郎をなだめて窮するときハ鈍くなるといふ鄙語もけりし外なき夜
星敷がなければ損の上なる損の卦と今建更なくもあらねど主も奴家も窮れて帯さへなくなりし辛
何ハせん非除舊との布帯でも二條買ハバ這貳分貳朱も残徹くなりなんべし然でハ盤費にかくよく
足らざるに足らねバとても媛御前の裸で道中なるべき欤這商議をせまりけれどもハ小夜二郎有理
有理と領きながら主人に對ひて听く如く造化なれバ我いともあれ婦人帯一條を求るなりの勘辯を
憑むのミ報條の中一ト條酒餘の値拾六匁分鏊を小雲妾時貸のみ京師に到らバ便りに就て
佗と返さんと遠慮なくいひでくと長総も口説くと主人ハ听あへず小可とても鬼ならねバ最痛しく思へ
ども連年活業不如意にて人に貸すべき餘財なし亦比旅客達の着れてハ是れし小荷駝獻ある。

破れたるが一條あり長ハ二丈に近かるべし目今食出てまゐらせんとと二ッに卞て結びあハ百ある帯に
究竟なるんいひてくと遽しく身を起し納戸に退て件の布を取て来りしを見れバ薑黄と油緑の段
段筋の染布の下晡に至りしまろ色ともいはず糾れ垢脂染て長汀曲浦に漁火を点し蜑戸が椦
縄に似たりしを長総ハ弾あげて世が世であらバ折々の寝間被帯にも繻子紗綸子を腰に纏ひし
身にあるを貧富栄辱地を易て今ハ逆旅の流浪へとて這破布を争何ハせんといふ小夜
二郎ハ慰めて縦帯の三人並でも盤費なくてハ明日より露宿何の日にか京師に到らん雲と喚
ぶ驛奴ハ稟索と帯に倣てもあるを二つ折る衣を引揚て並し隠さバなど憂しまして姑且
甚忍あのと屡諭し領せて二ッに裁て帯にする藍染川にあらねども吉備の中山まくの貞
金絶に貳分貳朱の路費の與に随ひ人視も恥も今ゆくに潜び難なる長総ハ再三
次嘆口氣して待るべしと豫より兎毛の杪に措く露路なるも知るよしあるバ丹澤なる我親里に
赴きて住に寓りて後にても亦左も右もまゐりし不悔しと思ひてけりと臍を噬めども追及べき

路をゆけば明日よりの去向苦しき煩襟に寝て安んと咳くのみ。傲まるる所ふ頃日の甲夜眠を
つ。憑く百の日の適才暮て程もなき小夜二郎と共侶ふ主人ふ別あ朝立別を告て入る帳を吊
緒もいとど短夜や。遠州臥莖を敷栲の枕ふ安く就けり。

第三十回　疑似の孽小夜二命を殞す　瘞金の計木綿張牢を越す

却説衿笠小夜二郎い長総と扶掖て京師と投て安く程ふ。あの日七人里三十六町里の路を走そ
藤江田の里ふ宿と投めその次日の巳牌時候ふ嶋田の驛ふ来ける折ふ五月の天ふれば大
堰河の水倍て渡りあぐと雪ふりぐ巳ふ信驛ふ客店ふ杖を駐め水の落るを
等たるふその夜ふ又雨降そ幾日も霖雨ふりぐ逗留十日ふ及び稍渡れとも
盤費い逗留の宿賃と歩渡の人足賃ふ残り少く使い果て金谷の里ふ到り折ふや
黄昏ふ及ぶれども宿と求ん便着いぐ鶏鬼徒ぐ身ふ逼く憂ひ患ひを抱く小

夜二郎い長総と倶ふ路傍ふ立在て宿借る人を羨ーけふ目送る程ふ日い没果て夕東ふ門
鎖も家の其里ともうるぎ〜ーぐ涙迭ふ吐そ恨めくも哀ーふ悔の八千遍百千遍甲斐
なきを線返も苧環ふ乱糸ふ糾る心細さを慰めつ慰められて共侶ふ金谷阪ぐ程ふ
山田の頭ふ野豬逐ふ穂屋あるそ戍る人のるーかぐ今宵い這里明さんそ件の穂屋ふ臥ー
たれども饑疲れるそ上ふ山川の音凄ーくて睡らんとすふ眠れぐ短夜ぐ〜今宵のみ生
憎ふ長く覚て稍暁くふるー時候旅客を無て哀ぐらん馬の鈴の音少えりぐ小夜二郎い
長総と又扶掖て山路と登そ菊川のるぐ〜辿りゆふ明るんと思ふる夜いるふ明ぐ三十町餘り
も来ぬうんと思ふ程ふ小夜二郎い憶ぐ足ふ蹇哩と躓撼ー東西ふ驚ぐ〜合る抗く
月を燭ふ熟視れい長二尺計るる糸柄の刀ふ莞尓と笑くるる戴て刀自ふ。これを見のひ
憶ぐも今宵ふ躓撼けて這個刀を拾ひ長総へ長総も合ふ笑て現捨る神ぐれ助る神もあ
ぐと宜く我们二ぐ命運るる憑ふ所あり且ぐ世のとるふ合て刀の好ぐい知ねども敷を

あり表装衣のいとのくしけ形するに售らバ必盤費にならん愛宕阿足ハ出来らりと祝して遮與毫を
小夜二郎ハ受合ふり腰に帯て是を今宵の歇店にて主人に示して售んといへバ那翁より鈎覚より
適方に来て價好らバ是で氣蝕と醫しうる卒兎と先に立ら饑も忘き草路の
夏草踏みて又我町へ登りゆく左のうらきらぬれバ乾浄る樹下に山神の禿倉ありけり長
總ハ小夜二郎に携れて這頭へ来る折天ハ稍明て茂林を離る鴉の聲ハ啼れども旅人
跡の絶えれバ姑且那里に憩んとて聊路を横ぎ件の禿倉に立寄りしに主なき一箇の箱籠あり。
小夜二郎も長總も是を何人か卸し措て出恭にまじらんと思へバ敢て掛念せず御宮に拾ひし刀を
取出て彼にあてて價を料りて憶ぎ時を移せども箱籠の主ハ出て来ず小夜二ハ猛可に心つ
きて長總に耳らくなるあんなハ何にえひとる這箱籠の重げなる内ハ衣物ならん然るを徒に
山中にうち棄るハ盗賊の所為なる歟然ども所以あるらまぞやそうる左まれ右もあれ
天の與るを取ざれバ還て咎めを受ると歟いふ古語あるを誰かしらん消々地に他所へ持て

新古今集 羇旅 西行法師
としたけて又こゆべしと思ひきやいのちなりけり小夜の中山

ちて售らバ盤費に餘りあり京師に到る日生活の本銭にならん知るべからず先々内を一見して當
値を定めんと篤と錢索まるを拙て曳寄せんとせしに長總急ぎ推禁めて四下とアナの聲を潜めて
又のハ這箱籠ハ最大なる鎖を鎖ろに厮鑰なきを取て速に披くる其頭に暇を費
も程に倘這主がかへり来て駝めて去べ爭何ハせん今うち披きてあとても夜ならバ何かあらん。
快々他所へ持ていなば宝の山へ入りながら空手なる悔なからぎや。といふに小夜二郎點頭てあるれバ
現その理あり今又思へバ這刀も箱籠と共に贓せし奴が今ぞ返せし歟料りかたしの非除然も東
西なきをも主にかへれバ今を復されん幸ある天の錫を猶豫して時を移さんや這山の名と異なる
ら我名も小夜の明てより好造化に安波が嶽中間の鐘ハ撞ざども金になるべき一箱籠呼
奇なる哉腰かけてまづ駝ふべしと重ハ荷や衣裳えけの紗綾や中綿然らバ駝んと待ひるへと
誇る虚口軽けれど重き箱籠を端近く引揚寄せて篤索に肩を容ても非力を悲しき。
声のみ虫や艶治郎是ハもうぬとうち卸もての甲斐なると長總ハ背に立ちて待ふて目を瞋

有像第四十一
古朝箱籠暗害小夜二郎
ほらをり盲るみちのわさたち

為ホと両個の笠と箱籠の上より結吊て下ホるを抵け推揚ると封手ホヤッと小夜二郎ハ抬起せ脚踏固めて徒身ホ附ても力車ろ後より徐ホ推めく卒ものべと先ホたろう弓張の心昨夜ろ餓て奴力十倍の慾ホ屈せるを又めど折々兵兵く足曳の山路を辿ろ程ホ思ひよろ来る一隊の荘客約莫十名許ろ棒と引提て近つ隨ホ小夜二郎が駝る箱籠と認けん迭ホ来る目と注と立留るあ。走るあり前後ろ這雌雄と集々と捕綢て是れ強人非さん。胡奴郎ハ昨夜初更の間ホ咱家ろ村ろ皺三の宿所を張ハ潜入て主人を惨く殺せ屍骸を那里ホ捨ておき臥房ホ送る鮮血と敷れ分明ろホの折一箇の衣箱籠の失ふ盗賊の所為ろけと知れよと皺三の兇小鈍梅ろ外ろ来て報ーべ時を移さず村人ろ聚合ハ詮議と皺三ろ亡骸と賊の往方と那這終夜索ホ這里を遭ハ天の眞罰縱非むと爭ふとも其の衣箱籠の笈索ハ鈍梅ろ蔽布の小裁とろ造ホ為ろとホ染色さ為ホ詳ホ行違ぬ正と証据今ハも脱る略ろ。箱籠とろ卸と索ホ係れと諸聲猛棒

突鳴と闖くの素是田野の民ろれ小夜二郎ろ腰ホ帯ろ刀ホ武勇と料り難て左右ろ敷も蒐ろと駭怕ろ長総と背ホ隔ろ小夜二郎ハ慌ろ聲ぬと立て衆人姑且鎮りと我ホと聞ホ我身ハ妖と携て京師へ赴く旅客ろろ這里ろ五町許後方ろ山神廟ホ憩ハ折這箱籠のあろ一ホ盗賊の所為ろホ為ん重くとも里へ出て主と尋ホ遽與さ為と慈善の心と背ホ為ろ甚麻ろ濡衣と被せん與欺人を害と東西と奪ハ強人ろんとせろハ左疎忽とのハ既ホ主ろ箱籠ろホ卒返せべ。受合ろめとハも果ろ人嘩く大家眼と瞪と誘ろ強人奴ろの箱籠ホ脚ろホ獨這頭へ来ろハ人ホ偷と東西と探ホ然ハ疎ろホ聞ろの音歩と聽ホ壮佼三四名持ろ棒を閃と敷ん找ん勢と禁むべくもあ。ぬれハ小夜二郎ハ吐嗟とろホ刀と光ろと引抜て寄せと角へと身単ろで後方ホ叫ん長総と駝搭と箱籠ホ心と肩も引れて進退不便の受大刀取ホ兵兵て怯む眉間を下高ホ敷れて苦と叫ぶもハ殿内居ホ撞と平張る邸舎ホ駝と箱籠底

抜けて内より出い衣物を被ぎ斬られ人の亡骸を引く駆く長総より大家を呼これを見て原来這奴の
皺三が屍骸と人を殺せしと箱籠と共ふ所を出て衣を轉ん空箱籠へ推隠しなる亡骸の顕を
表へ天罰を虚減るん逃ると罵りつ又駆ち棒の肩ふ引くる長総い噫悲しや声立て泣き叫び
俯伏そ禁めても听ず血気荒れ狂ふ這街妻奴も同類るん妨げ寄と襟上を掴ん引摺寄
せて脆て素とそ揖げふける登時大家棒をそ仆伏くる小夜二郎と突動と又突動と忽ち初
一駆ふ酷く眉間を破られる宵所ふ出ずも似ず三魂六魄五體とちりて又生くべもあ成れ先
あのうと村長ふ報て領主ふ訴んと部をつ二両名林鹿と投て走るもあり或い程遠く級山里人ふ
うと報て地方ふ法則ふ憑るもあり這它い西個の亡骸と長総とを成りて姑且便宜を等程ふ
皺三が妻鈍梅い走り還り村人ふ縛の趣を呼知と泣瞳を腎む目ふ涙山路を伝ひ来て歎
弥増を良人の屍骸ふ推り着き伏沈む涙の間ふ小夜二郎が亡骸を長総伝と疾視る
恨の星眼狂ふ如く罵る折る。近辺山里の毎ふ那這より聚ひ来る麓路ふ村長い這地の領主

曽根川權頭高春の家臣橋高猶九郎有幸ふ案内を引て俱ふ這里ふ聚合け徒を領
主の家臣ふ速ふ出て来るを看官訝く思ふもあんを別る故ふ昨夜皺三が宿所ふ強
人入り衣箱籠と空縞去り折皺三在ふ臥房ふ鮮血徒と点く村長が訴ふ所ふ強
人を穿鑿の與橋高猶九郎い野兵を引て件の村ふ来る折村人付ふ夜の中山を那強人戍
駆ふ仆を支黨る一個の女を捕捕ふ縛の趣を村長ふ報ふ猶九郎い村長ふ呼案
内ふ立て来て詮議ふ及び登時皺三が妻鈍梅い涙を禁ず恭く猶九郎を対て惶れ
ども禀上ん賤妾い御米邑四老村の小經紀藪坂皺三が妻鈍梅と吸做ふ御ふ使ふ御ふ村長を
ふ訴ふ良人皺三い年来蓄積の持病ふ昨日の黄昏ふ買賣を果て帰り折猛可ふ
持病の発り出て臥伏ふ賤妾い茶と買の上を薦めんと出ず些の銭を懐ふ
走て隣村ふ赴て還て見れば良人い在ず臥房ふ鮮血駄く跡を浸せ駆け叫び四下と
尺ふ倘の板廚を容措て衣箱籠を失かが原来縛皆強人の所為なべ。と思ふ心を

良人の子を西鄰の村人に報ぜば大家驚怪誤立て然らば往方を涉猟人を通宵環索られ
御高に件の強人の這里に在りしと聞き出で殺す仆るるとも敗られば走る系で問へば良人の亡骸に強
人の背に負はる賊物の箱籠を顕れ出づるしとぞ
物の箱籠と共に板厨の内に秘措にると那強人が奪合るしに疑ひる良人の仇に村人に殺
されたりしかば怨を雪ぐに似れども支黨の賊婦あり這亡骸の村人に問せあり分明なりんと
いへ四老の村人に共倍に找に出で恐れるに禀上に小可毎に鮫三が隣人某申しに目今鮫三
が妻鈍梅が呼えに小可毎に鮫三と強人の往方を索て天明て這処に来る折那強人が箱
籠と駝搭に女子と俱に禀に撞見せに箱籠に隊伍知る歛索に記あるとて賊へけるとも
くも猜と搦捕んとせれば強人に刃を拔て殺拂々々脱去んとせるに脱さで殺る棒に
賊に眉間を破れて脆くも息絶ぬ却支黨に賊婦も逃さじ躰て細めその来歴を譴問
ひに頼陳で罪に伏せで勿論那頭領の強人に搦捕るべしと那に刃を持られば多勢な

ども不如意を殺る殺ひに聊疎忽に似れども勢ひ実に已とを得ざるの義を査めかとなるく
禀に来る猶九郎と所に鮫三と小夜二郎が亡骸を検る折村長に現鮫三に肩と胸月に
刀瘡刃尖瘡二所に這肩の痕に初刀を胸に十々滅と刺る又這強人に新に花田紬の
単衣を被るに似せる海松の如く捲無る破布を帯に身の皮皆見せざりしも是又人の
證据なを生拘るべ支黨に穿鑿の喫驗にんを殺せに惜むべ先に賊婦拷
問せんとに村人に問るで長総を牽立て猶九郎が面前に索人を迫て推居け当下橋高
猶九郎に長総を花と疾視で出処来歴姓名と夜盗の顛末を責問に長総涙吐て
陳る奴家に相模の某の里に京師の所親許赴くに這人々に疑れ殺る殺されしを
我弟衿笠小夜二郎と喚做るに奴家に名を長総と喚る嬖婦で侍るか昨夜に金谷に明
る歇店と立出て初て踰る這山路に荒祠に憩し折社壇に在りし那箱籠に小夜
二郎が亡骸と箇様々々とに然ば里に主に返ねるに婦る般器具に資に

あるのやせんとそ駝せのこゝろ日ふ我れ〻輪兒の為ふ盤書貫さへ仍裏さ咸竊れて被る俤ふ帶だにもあ〜ぎ者ふ苦〜ふ悔〜ゆ駝せ〜箱籠の故ふ人を殺せ〜盗兒ゆんとふるい黄安ふ出るけるを誣言ふ只痛まゝ人弟ゞ枉死寃屈の科い繹るも誰を憑推ふ選る京師へ獨いる

るべを哀〜れかるゝと声立てゝとゞろふ泣沈むゝ猶九郎い少あを呵ゞとゝ安ひて賊婦奴親ゞ陳

ゞ者ゞふ只その箱籠のこゝゞ者ゞ小夜二郎とゝ那強人の帶る刀い皺二ゞ秘藏の中刀へとゞ妻ゞ許

證据明白左ゞ右ゞ脱ゞ路ゞ有つゝ隨ふ招ゞせゞゆゝと責れゞ長総涙ゞ拭ひて那中刀い來

ゞ者路ゞ小夜二郎ゞ不意く足ふ蹴躓ゞ捨ひゞ窮ゞ竊ゞ人ゞ仇〜ゞ者ゞかゝとゝいゞ者ゞ果ゞ猶九郎い

眼ゞ瞪〜聲苛立ゞ這奴酷胆太〜然る浅〜ゝ搗鬼ふ小児ゞも欺ゞ抑若ゞ者ゞ舊果い

相模ゞ何の里ゞ良人の姓名その身ゞ素生今番投ゞ者ゞとゝ京師の所親い甚麽ゞ者ゞ快

詳ふ言ゞ者ゞと繁〜ゝ問れゞ長総いそれゞとゝ答る口ふ言る顔赧ふ言ゞ者ゞ女合難〜ゝ言ゞ者ゞ

女〜ゝ頭ゞ拾ゞ我亡夫い鎌倉ゞ威勢ゝゝ武士ゞれゞも這身ふ言ゞ者ゞ侍ゞと名告ゞ者ゞ

増人のゝその義い凡〜ゝゝ又京師ゞ憑〜ゝ親族ふ言ゞ者ゞ馴〜東ふ住不樂ゞ舍弟

と俱ふ苟且ふ立ゞ者ゞ旅宿ふ行ゞとふゞ者ゞ猶九郎い冷笑ゞ者ゞ汝ゞ這奴ゞ口の強さゞ女流ゞれゞも

暴く世ゞ問ゝ究ゝんゞと思ゝ〜ふ守ゞ欺く島許の癖者ゞ背ゞ痛く鞭懲ゞて招ゞさせゞよゞと敦圍ゞ

たる。下知ふ從ふ橋高の暇兵ゞ齊一阿ゞ応ゞ走ゞ蒐ゞつ長総ゞ背ゞ惱ゞ十ゞ兵電光撓ゞて

叫ぶ長総のふゞう初ふ〜ゝ猶九郎いさのゝゞとゞ暇兵ふ呵責ゞ歩ゞさゞ鈍梅ゞ弁ふ村長ゞ西所の

村人ゞ〜ふ示ゞ者ゞ賊婦い実ゞ吐ゞ者ゞ信ゞ者ゞ證据亮然ゞれゞ皺二ゞ害ゞく。強人い問ゞ者ゞ

那小夜二郎ふ極ゞり信ゞれゞ島首せゞれゞめゞ守ゞ下知ゞ〜ん折ゞ屍骸ゞ旗陀羅ふ成ゞ

べ。又皺二ゞ亡骸い鈍梅ゞ隨意葬ゞ世ゞよゞふ勤ゞ

捉ゞ曽根川の城ふかゞ程ふ村長ゞ村人長総ゞ牽立ゞ暇兵の後ふ從ゞ城内ゞ送ゞ

ける這日ゞ〜長総い久〜獄舍ふ繫ゞれゞ拷問數回及ゞ苦痛ゞ忍ゞ些も屈せゞ奴

家ゞ〜ゝ小夜二郎い箱籠ゞ空稠ゞ人ゞ殺ゞ仍ゞふゞ疑ゞれゞ是ゞ薄命ふ〜ゝ縱

責殺さるとも知ざるを做せりと沿てそまきけれそ冤枉と叫ぶのこえけりその志二男ホて恥と知ゝホあゝねども身も易ゝと呉ぬ多小夜二郎と殺されるゝ怨ホよりて死を怕れぬその冤と雪ゝこそ俱に死めと呉のこゝろとそ有司們もゆゑ疑念起りそ罪を定むゝこゝろをと主君ホ糾えあげて縛の理會を問れば高春（増根川権頭）頭を傾け怎る疑獄ハ縛を急ぎて時を待べきあのづゝ虎実を知ゝるゝ照験あゝんいゝ緝捕の雑兵とゝと封れるゝ人と駈捕せと命せる。

よりて秋より冬ホ至て捜捕るくめヨるゝゝを頼の博徒をゝねば白日掙の小賊を長総ハ疑獄の與ホ照験ホるべもあゝぶそその罪重ハ首刎られ軽ハ追放せられる。爾後一個の罪人あゝ。ゝる木綿張荷二郎と喚做る出没不測の草賊を此ハ獄舍ホ繋ゝる折牽れて女囚牢の頭を過りゝかハ憶ぎも長総と自他面を照せホ長総ハ何とゆゝん面善ホ似られぬ折ゝ瞟昏のヨホーてよく相定ねば猶念せぬ那荷二郎ハ長総とゝゝゝゝそ鄰れる獄舍ホ繋ゝれけり。その時在囚の罪人荷二郎と長総と只這男女二名のゝ獄舍ハ雌雄の差別ゝれぬ板壁一隔ゝりければ咳く聲まぬ沙えゝゝ面を相ることかゝりけり。這獄舍預ハ塚見木兎六と喚做たホ。その性則薄貪婪也。地獄の沙汰も黄金佛の光ホよりて賞罰ゝる長総と荷二郎ホ素より銭あるめゝゝねば木兎六を高望だりも佛眼ゝのそ他們を相ぬ時ホ鳥雀水食難て夕陽ホ啼ぬ鴻鴈島夜ホ聲ゝと雨雪と催ぬ年の尾ゝホよりゝかハ獄舍ホ囚徒稀ゝれども荷二郎と長総ホ尋常の罪人ゝぬ沙えゝ癖者ゝれぬと木兎六を獄卒の癖ゝると罵の懲ゝと問ゝ時をくこれを戒めぬその身も日ホ二次夜も二次ゝ輪り心を屬て些も怠ゝりホ既ホ日と僂十二月下旬ホ至りて春と迎ゝ縛ヨヌけれや木兎六を稍怠りて日夜六巡ゝ巡ゝ況獄卒們火と索て獄屋の頭ホ在ゝ折ヨヌゝ荷二郎いこれホ便りを沿て有一日悄々地ホ板壁をゝ敲ぬと長総ホ其ゝ嘯長総刀祢と呼ん刃ハ我を忘れ狡我いゝ刃と認ゝゝとゝホ長総訴ゝゝゝゝ和殿ハ何罪人ぞと問べ荷二郎ゝれ我いゝゝ五月の時候夏織屋絹ゝゝホ偽名ゝ富士川の頭ゝ刃們を騙居ホ撰て澳津の浦ゝ歌店也。盤費行裏その它東

西まで咸掻攫して走りくる陸奥生育の物師宗宣の名ハ木綿張荷二郎我が身ハ出没
不測の本支と年来自負ある由断なく敵這地へいま日緝捕使ハ捕へ鈍や獄舎ハ
繋がれ居ると報る長総さてハとぞ且驚き且恨めし過去来し恩ハ出て胸ハ満る憤りの
身瀬もあらば睨へ小雲時応も世ばりと荷二郎さてと慰めて腹立ある世話ハ地獄ハ
相識ありきのハ怨敵ハ同病相憐むが是人情なりと諭せば長総冷笑して
詞敵もなき獄舎の艱苦ハ堪ぬ折ふと和郎が宗宣ハ耳あるや御面ハ和郎ハ謀られて東
西皆喪ひ一ツの餓渇ハ逼ア逆旅の艱難なが所以ハ我身ハ寃屈の科ハ狗死なく
我身も這里ハ囚れ世と思ひ生と易ふとも怨ハ晴ず仇人のなが獄舎ハ繋がれハ祈ら死神も
我與ハ慰めなき天の冥罰訓身ハ是寃枉の罪ハ死とも和郎が首と刎られと我命終るべ
快く目と閉ぬ悔かぬ争奈ぞと敦圉に迫て怨ぎ荷二郎も亦冷笑して恨ぬなそ
愚痴人を騙局ハ懲て畧るハ是則我が生活謀られるハ浅慮智の足らぬ

へらで人を恨ハ愚昏なぞ然ば禍も胎ハ又福も基ハ死ぬ那青年児と第々と宣ぶも
情郎なるハ那折ハ我只一見で猜ふ意ハ那青年児ハ素是ハ夫の密夫ぞ他郷ぐ
夫婦ハなんぞ惑ひ出ふハ〜ぞらん好ら情由ぞ旅宿ぞられば禍ハ是その
始と原れば身ふ出る錆刀ハ命と絶ハ仆る青年児の狗死ハ獄舎ハ繋がれ
も我ハ盤費と奪れる故と為ハ仆ぬ悟ぞとハれて長総忙然と初て酔の
醒ふぞ悔く此ハ且羞て人ふ合ハ
祢我ふも為ハ夫と俱ハ居所の羊ハ
極ん然ふと怨と転ん命と延る幸ハ
解く與ハ我年来做ハ悪支と三ツ懺悔せん這方へ耳と生非ハ我身年十五の春親ハ勘
當せられふ悪とてせざるなく初ハ陸奥の信夫ハ今ふ十稔餘ふ前ハ秋渡瀬の
城隍神會の折年ふ許ふ一個の女の子と拐ふ越路遣ふと責んと思て俱と越後へ赴

く程に件の女の子ハ年に倍りたる性怜悧なりけるを我ハ然すでに心もつきて不毛山の麓路を肩に
うち乗して過る程に女の子ハ路の樹の枝に攀登りて喚べども下らず困じて其里に立在る折から
旅なる武士ありて我を良らぬものぞと猜して搦捕んとせられしが伴當さへありければ辛うして
逃走る山路の葛藤に脚を引れて幾百仞なる谷底へ落たる侭に息絶たりしが命運尽ざれ
ばや其次日の暁がたに我に復りて獨然と再生の福ひあるものから轉落して折樹の根
岩の稜に身を拓傷して額頭にも脚にも血に塗れたる疼痛に得堪ず遮莫なほ幸あるハ照つゞく日に
渓水涸れて身を浸すに至らねども然而ありけるにはあらねば左右して又舊の山路にかへり登りて越の温
泉に赴きて二十日許湯治して拓傷ハ稍愈たれども今もなほ我全身に舊瘡の瘢ありける寔ハ倭
故あるにや郷國に在りし日に虐談して幼稚き時に鎌倉なる八幡宮の石階より倭くのなるあるにより臘わざ
る内陣を今ち開て拜まれたる縁起ハ又只ならねバ倭て越後の寺泊或ハ新潟越前なる三國な
ど徘徊りつゝ這里に半年那首に二月と年を累ねつゝ近属ハ東海道に流れ来て一両個の伏家と
倶に上下りの旅客を騙局に掛て得る錢ハ世わたりの護摩の灰ともなれバ身を温るまでもなく賭錢と酒とに
皆立減で做ても三百六十日已んとすれど已られぬ秘密の約束あるなれバかゝる身を騙局に掛て後先ハ
走りて這地に來て却人の與身の與ハ又一挊ぎ為しつゝ計る随意做てしバ聊所得なきにあらねど
又那伏家両個の奴們ハ配分鈔合で澳津より別れて鎌倉に赴きしに年来の悪事發覺れて
終に首を喪ひたりとなる後に聞えてかゝれば我身なりハ善もなく這地に今茲を不程に人を密許や
せられん不意と討れて或る日に鈍くも搦捕れたり遮莫我ハ死せずして侭ならぬものあらず欲を豫め
ひとつもあれバ計較措たる一條の活路に憑る牢を越て脱れて他郷へ走んと欲を備舊悪をと
ふとなく這等唱家に従ひてやゞ春に値んとするに兄弟ハ我妹子を脱りて折に榎さんとそ
苦樂を偵にせむとなる真実の商議ハ左右もの深念を決めて後悔をするあるべし
示せ奸賊の寃胆意外に出しかバ長総ハ呼て毎なの験ぞまなく嘆き下て肚裏ハ安からず我
倭なりしも小夜二郎が枉死の原ハ這奴人の盤費を窃れる故なれども我を憎しとて従兄ハ我身を

寃屈の罪にて死ぬるものは、毒薬も亦病癈よりて用ひて人の死を救ふ效あるにもあらざれば、姑且く
命に任して死を免れて後までも、又其術もあらずれと尋思しつゝ聲を細めていはゝ趣なれども過
世に結びしよしのありて、今生にての腐縁不思議とやいはましき、再會であるかしその議論する
ことなくて後々までも神かけて相伴れなば、あよ辛運後の世までも從ひまつらん。必違へなさるなと、卽便の
応に荷二郎は大く喜びて、懇切に慰めける浩る処に、忽然と人の足响しでければ、荷二郎も
長総も鬼にも來られと、板壁の頭を手を立離れて身を縮して在けるに、果して別人ならぬ獄
舎長と聞えたる又那塚見木兎六は、四下を屢々見かへりて、噫難義なる獄卒們が、一人も在らぬは
ぞや出ぐと喚立るを、荷二郎急に推禁めて、やよ大人小聲に時を移せず、悄々地に稟まを一議あり。
なさく大人の貌に與ると願ひ、人を召ぶまでの這方へ入らせ給ひかしといへば、木兎六は訝りて、這奴何ぞの
願事あるよ、益なき事と思ひつゝ、口と向ひて鎖をち開きて獄舎の内に入りしかば、荷二郎は身邊近く
跪き聲を密めて、小可積悪の天罰を既に禁獄せられしは、露命久しかるべからず、是自

業自得を悔て返らぬ事ながら、大人の御慈悲莫大なる、禁獄の初よりいまだ獄台の呵責を受ず
活ける御恩を報せんと思ふもの〻、その甲斐もなき身は是檻の獸にぞありける。然は東西わかぬ
因に告なる小可いさゝある此金五両と元祐銭壹貫文を一箇の竹の筒に收めて這里より
程遠らぬ信々の山に瘞措れば、その山は箇樣々々。信々の処にて栗生松ある品ありき悄々
地に其処に赴きて、みづから貪せ給ひかし。さあれ小可は術ありて件の筒を封しつれば、輒く開きがたかる
べし。そを打砕きなば金も銭も立地に耗て、あんなるに入るべからず。是ぞ從に携り來て小可に見せ給へ。
術を復し封を開きてまゐらせんといと易げなる事をもて説くを、木兎六は心動きたる、木兎六
外面なりて其の金実ある事ならば、尋ね得て合すも甘からずと、彼は獄舎の長、罪人の隱財残
私に貪るよしあらんや。必守にせよと答へあげて、あん上日に應ずる事なれども、然して汝が忠告を仇に
做すに似て不便なり。好々そ事ちあるべし。秘よ外に漏しそと口を鉗めて、遽しく立出るとき、舊の
ごとく楗を鎖して退りけり。その次の日、木兎六は獨宿所を立出て、昨日荷二郎が諭えしは

山邊に赴き桜を索め件の笛を掘出して、それを果して七日を封じて符を寫してありければ金の紙をんとを怕れてそが袱に包み携還りぬ。その夜獄舎にて荷二郎はせ寄りて荷二郎姑く呪文を唱て躰く笛をうち披くに数も差いぎ宋銭と五枚の金内に在り木兎ぞ含笑をがら笛共侶に受收めて感歎するを大くるぎ皺備るるを額に加えて適汝い賊徒に似けるく賢を愛する心あり。夜分に枷を除たるさせ今宵ゆるして快く睡れかと耳元で囁く着なる鍵児とのそその枷を含み卸せば荷二郎鉄び額をつけて倩御恩を受されるるもあん報じと仕ん小可いその外にも瘡あくる金三十両と宋銭二貫餘りあり。その大なる笛に藏て又件の山路に昨日の処を相距ること十歩許東る葛石の下にそ那笛いに乳勿論穿食のもの秘符れ今宵のごとくそが伏にそ来の呪を唱へうち披て咸大人にまるーせん今い要る銭財より後世を人の大事るれるーん後い一遍の廻向を痛心をまるのまとい水兎六領にてその義いいでもちるるう翌又あんと戸を鎖して宿所に還りぬ。老小にも告ぐ肚裏に思ふ歳暮に罪人稀ゆく

此の人情も獲がくに秘児に放蕩を頼りて親の東西を東西とも思ぬ。窃出して色と賭銭とに使喪ぶそが上に愛女を甘甲に遣嫁れば散財まるる。然るに那荷二郎が痩惜にて金五両を盗出ひけるに獲のるに又三十両二貫文ありと告げに妙るるるとに獨樂に胸算用に。その終夜いもねられぬ。次の日早日の暇を偷て又那山路に赴きて這里狹と思石の下を穿れば果てあるに亦長く太きるる笛ありけるを含み出て又袱に包て宿所に還りぬ。その夜更闌一時候夜巡りに假托て獄舎に入て件の笛を荷二郎に授ぶ。荷二郎はそれを受合うて兄文を唱ひうち披て笛の内に銭も金もあるを知て九寸五分なる匕首と紙ねー鈎索に木兎を光に乞て訣てそれに甚麽と問せる果ぞ荷二郎に仕の刃と見りと見て驚て終と刺さ刺れて一聲苦と叫ぶと突仆れ一巣一撰て再ぶく[illegible]木兎の者羽にもせで息絶けり。這段いまぞ盡さるども楷數巻毎に定編と續ぞ巻を更く。第四集三十一回に鮮分にを聴ねかー。

糸を吐くたくみに似てもあさまし紀
えさうをひらめくてふばらうづくろをさを
閃短刀荷二郎刺木兎六
かひなの柘ミ千蜘蛛のおこるひ
荷二郎
木兎六
有像第四十五

有像賛詠一十五歌
亦是作者所自題也
開巻驚奇侠客傳第三集巻之五終
木兎六

○著作堂手集精刊俠客傳第三集畫工筆工剞劂目次

有像一十七頁　五渡亭國貞　蔦蝶

全卷淨書　谷川　金

剞劂第壹卷　朝倉　伊八

第二より至第五　櫻木　藤吉

○曲亭翁新編國字稗史畧目　文錦堂　合梓發行

開卷驚奇俠客傳第四集

第三集は板後推つ紀く發行遅延の事第三集は局面詳るべきの本集は至て来く分解を且小六と姑摩姫と初面會の段第四集まあり三集四集と合一てるとなりその奥ひらく深長るべし毎集五卷

おかべく第壹集第二集毎集五卷共三十卷前年賣出置第五集来未肯開板

俠客傳追々開板の故とりて本集の續刻頗遅延及ぶあるべし賜顧の君子ひのみよりこの旨を考えあれば作者曲亭翁ふたひ促く俠客傳四集と共に刊行を發販近日あり毎集五卷

近世説美少年録第四輯

同書第一輯第二輯第三輯毎輯五卷共二十五卷既に刊布訖第五輯来未正月發販

水滸畧傳　第壹集　水滸傳百八人の列傳を一人別に畧述して批評を加へんと水滸傳の拙所を知るとこれにまさるべし　近刻

水滸後畫傳　第壹集　水滸後傳四十回を飜譯通俗にく原本の趣向に倣ひざる処を筆削をよつひの通俗本と同じかを　近刻

俠客少年二書衆議評判記第一集　その書まられば原なのまを詳にまるべく分りるを十倍をとる諸才子評定　近日出來

曲亭翁閲

南總里見八犬傳第九輯

本輯は大阪毛乃犬出道等即ち復讐の段をつゞけ一旦大江親兵衛の列傳に至ると云俠客美少年の二傳第四集の稿本お来の後つゞけて是と綴らんと刊行十卷當年の秋冬の比あるべし

○家傳神女湯　婦人の妙薬　渚病の妙薬　一包代百銅

此薬は家秘の良方にて産前産後の病は勿論婦人の妙薬なり

○精製奇應丸　大包代金弐朱　小包代五ト　中包代壱朱五ト

薬種を選み製法丁寧なる家傳の加減を以て効験あらはの功百倍あるも神のごとく功のあらはれもつてまみつまひとりあり

○熊胆黒丸子　一包代五分　一包代五分

○婦人産乳の妙薬　産後の物のこと手ぬかりなく産後の病ひとなりたるを一包代金四朱半包代二朱

製薬本家　神田明神下同朋町東横町　瀧澤氏

弘所　元飯田町中坂下南側よりの向　たゝ沢氏

○古今珍歌れあり　仙女香　一つゝ　四十八文　黒油美玄香　一つゝ　四十八文　江戸京橋南へ二丁目東側角　坂本氏

天保五年甲午春正月吉日發行

江戸小傳馬町三町目　丁子屋平兵衛

書林　大阪心齋橋筋博勞町　河内屋茂兵衛板